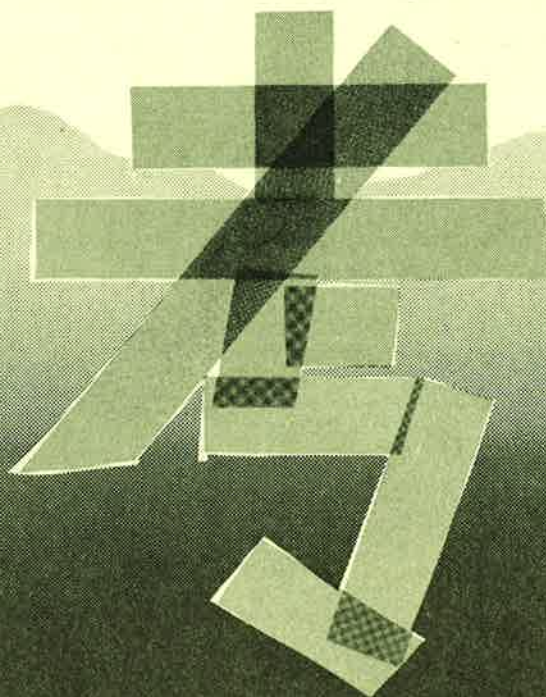
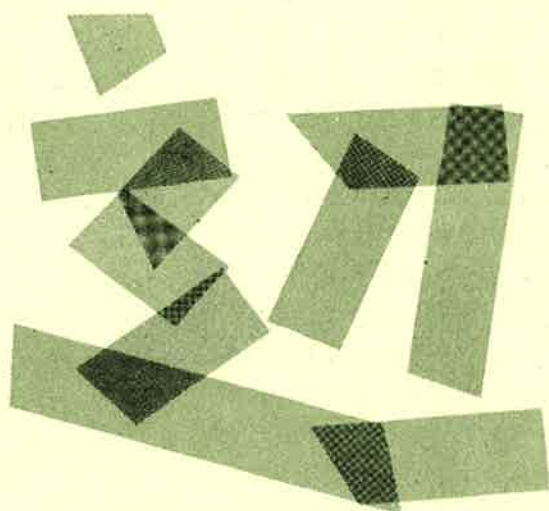
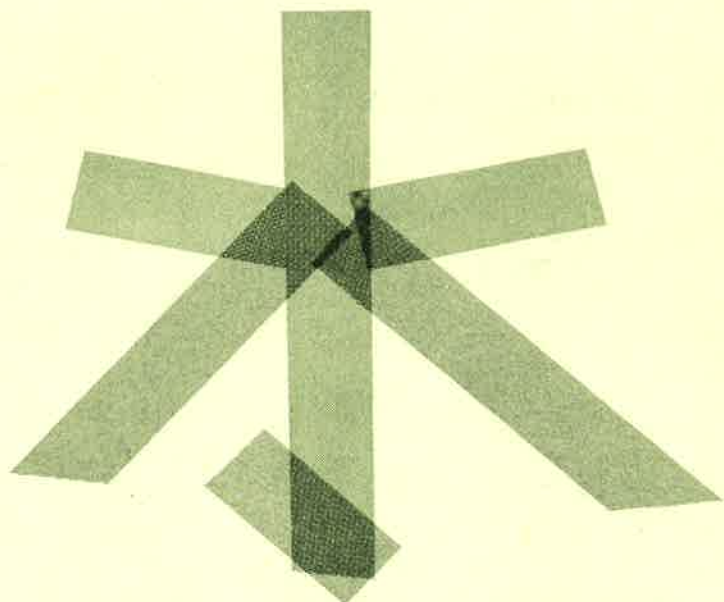


一九八九年一月



とうとう「新年あけましておめでとうござい
ます」になってしまいました。窓の外では雪
がちらちら舞い降りてきます。鍋と熱燗が恋
しい季節になりましたね。約10ヶ月ぶりの水
辺考第2号をお届けします。時のたつのは早

いもので水辺の会も1歳と3ヶ月です。そろ
っとカタコトを話せるようになった頃でしょ
うか。これからどんどん自分の世界が広がっ
ていく……そんな予感のする1989年
の1月であります。



まずは「水辺の会」会長の思うところから……



「水辺の会」の2年目に思う

大熊 孝

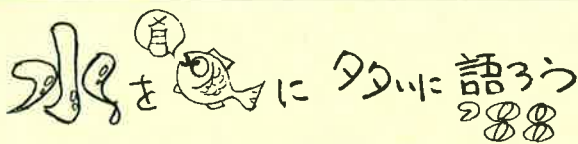
1周年記念の『水を肴に多めに語ろう』(10月30日(日))は、パネラーをはじめ参加者の皆さんのお陰で、新聞や会員以外の方々からも大変楽しく有意義であったと好評を得ました。また、11月27日(日)の総会では、角田妙光寺の住職兼会員である小川英爾さんに会場を提供していただき、寒い中多くの会員にお集まりいただきました。その際、小川さんには妙光寺の水害と河川改修の苦労話をしていただき、大変勉強になりました。ここに合わせてお礼申し上げます。

さて、その総会の時にも話したのですが、来年の夏ごろ、先日のシンポジウムで小熊さんから報告のあった「近自然河川工法」についてスイス、ドイツに見学に行き、10月の2周年記念の時には「水辺の生態工学シンポジウム」を開催できたらと考えています。この話を、生態学の権威であり、「近自然河川工法」について詳しい信州大学の桜井善雄先生(長野県水辺環境保全研究会会長)に、たまたま新潟でお会いする機会がありましたのでお話ししたところ、ツアーをくんで一緒にドイツ、スイスに行きましょうということになり、かつ来年10月のシンポジウムへの参加もご快諾いただきました。ツアーのことは皆さんにもご参加いただけるように計画したいと考えています。また、シンポジウムの日程は、発会が10月15日でしたので、14日(土)あたりが適当ではないかと考えています。これも詳しく決まり次第いずれお知らせいたします。

ところで、なぜ水辺の「生態工学」にこだわるかを一言申し上げておきたいと思います。

「生態工学」という言葉は、まだ世の中に認知されておりませんし、どう定義してよいかわかりませんが、今感じることを少し綴ってみましょう。私はこの言葉に、イキモノを通じて技術を見直すことの意義を感じます。むしろ、イキモノを扱う学問、技術はあまたありますが、それらは「生態工学」と根本的に異なっているように思います。例えば、バイオテクノロジーにしても、自然の中から人間の都合の良い部分だけを抽出して扱っているに過ぎず、従来の近代的自然科学の延長上にあるに過ぎません。即ち、原子を扱うのも、遺伝子を扱うのも基本的態度は同じであり、部分にのみ注目していると言えます。部分にのみ注目していると、だいたいが一方通行の科学技術になってしまい、生命の循環系を絶ち切ってしまいがちです。例えば、近代社会から吐き出されるゴミや汚物は、どこかに捨てられるだけで、基本的には循環利用は考えられていませんし、原子力技術にしても使用した後の燃料棒の始末は宇宙にでも放り出さないかぎり解決のつかない問題となっています。今までの近代的科学技術は、自然が無敵であるという前提で、自然からの収奪と自然への廃棄を気ままに自由つづけてきたといって過言ではありません。宗教的概念で言うならば、天国→現世→地獄があって、天から得られるものはすべて取得し、現世で不要になったものは地獄に送り込めばよいという考え方でしょうか？

これに対し、「生態工学」は、ありのままの自然を部分に切らずにトータルに扱うことを前提とし、生命の誕生・成長・消滅を循環的にとらえ、その循環系一輪廻一を壊さずに、人間活動をその中に組み込んでいく技術と、定義したいと思います。川が対象の場合でも、治水や利水だけでなく、川の魚や鳥、昆虫、



『水を肴におおいに語ろう'88』と題して会の1周年記念イベントを行なったのは、皆さんご御存じですよね。少し遅くなりましたけど、来られなかった方のために紙面でその様子をお伝えしたいと思います。最初に断っておきますが、ここでお伝えできるのは全体のほんの一部です。当日は事務局の予測50名をはるかに超え、100人近い人が足を運んでくれました。大熊会長の人格か、会の魅力か、ユニークな顔が揃ったバネラーのせいかは知る人ぞ知るというところでしょう。

といった前置きはさておいて、肝心の内容についてグリーンシグマの相楽さんから紹介してもらいましょう。



「初めに、事務局から一年目の総括として生活者の目で水辺を視つめた成果を申し上げました。水辺を子供と一緒に歩いてゆくことによって、次のような確信が持てました。それは、水辺が親しみを持てる状況にないということです。今年はこのことが思い知らされた一年であったと言えるでしょう。」



山道省三さん

『河童になって川を楽しむ会のレポート』

シンポジウムのゲストとして「よこはま かわを考える会」からわざわざ来て頂いて、6年間のユニークな活動を報告してくれました。庄巻は、三面張りの水路風小河川での清掃と遊びと宴会(食事会)構成のイベントでしょうか。私たちよりズーッと恵まれない環境で、自然復権の活動を楽しんでいるようです。是非、私たちも一度お邪魔してみたいものです。

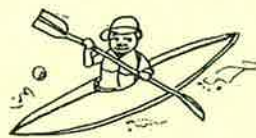


弓納持福夫さん

『水辺の写真家』

私たちがよく目にしている水辺や田園などの風景。時には光となって新潟の美を磨き出している写真家です。とりわけ暗く表現されがちな新潟を、豊かで美しい風土として表現することをライフワークにしているとのこと。

魚野川の素晴らしいポイント、阿賀野川の源流から河口までの川の輝き、信濃川の早朝の黄金色などをスライドで紹介して頂いて、会場のすべての眼がスクリーンに釘づけになりました。



土方幹夫さん

『水辺のスポーツ家』

土方先生は、子供達を教える若い優秀な先生をつくるのが仕事です。御自身も野性的な感性をもって、山や川に挑んでいるスポーツマンです。様々な水辺を通して、子供達に学ぶこと習うことの意味を教え、子供達がその中で泳げる水辺をつくるためにも、ふるさと新潟からよい政治家を出すべきであると訴えられました。



百武正雄さん

『水辺の料理人』

湿雪多雪地域である新潟県の北部、村上市は江戸時代より鮭漁が盛んである。高多湿地域の生んだ独特の「鮭びたし」は雪国ならではの保存料理である。その鮭も、三面川の上流の自然と、伏流水のある川と、豊かな海のかみあわせで生れている。その川を守り、育て、浄化していくには一人一人の心がけが出発点であることを声を大にして語ってくれました。



宮崎謙一さん

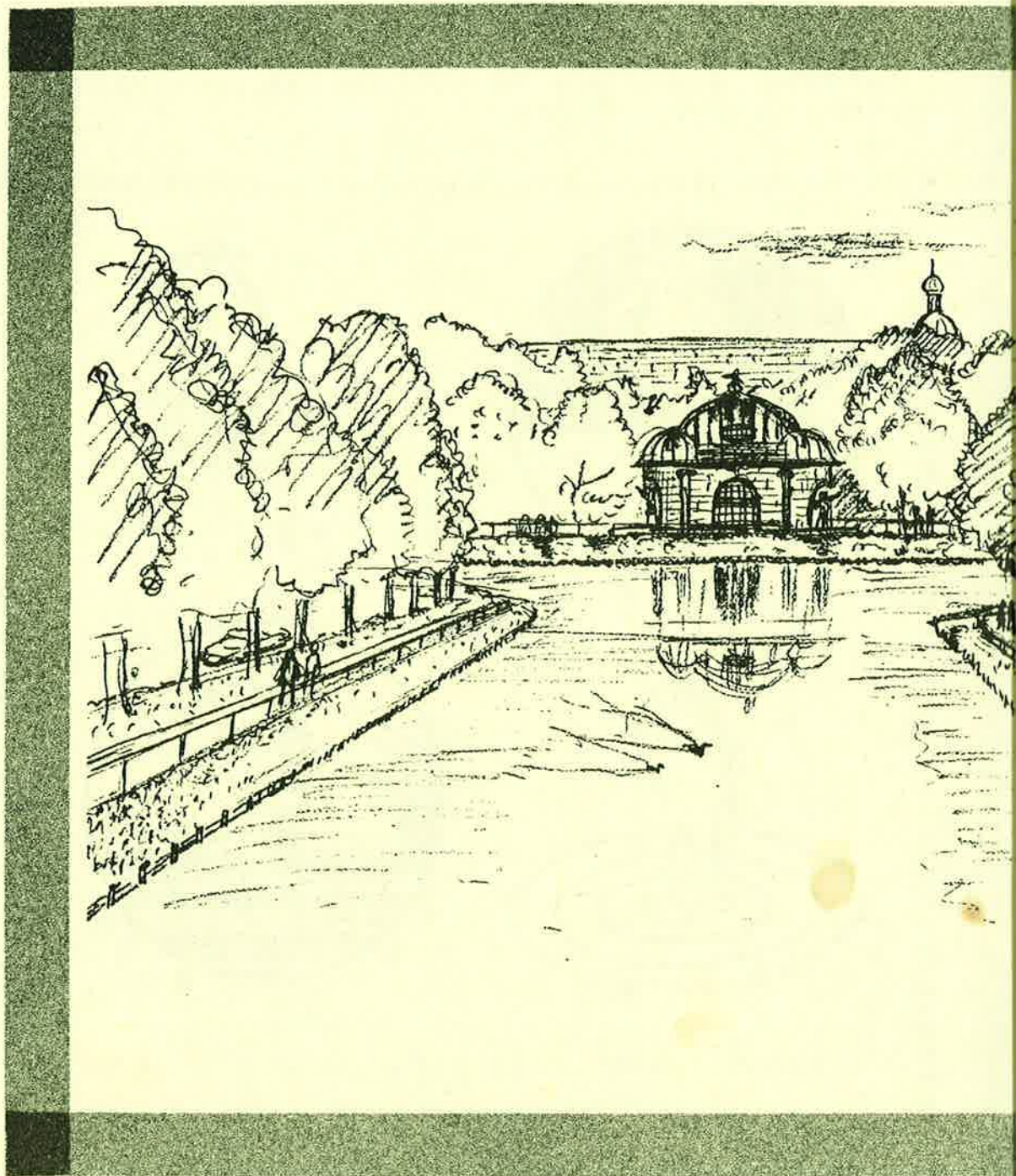
『水辺の音楽家』

人間は水音に対して、安らぎを感じるが、現実の身の回りの騒音で、現代人は音に対して閉じてしまっている。結果として、音に無関心になり、騒音公害を生み出している。古典ではヘンデルの音楽がある。水上での独特な反響で深みができる。水面では音を遮り、土手で音は反射する。カナダの音楽家で湖上で指揮をし、独特な音作りをしている人もいるとそうです。



その後、様々な人から活発な意見が出て、会は後半になるにつれ、大いに盛り上がりました。当日行なう予定だった総会も取り止め、ギリギリまでシンポジウムは続けられたのでした。ここに書いてあるのは、本当に一部分で、先生方からは、もっといろいろなこととお話していただきました。その後の二次会も、さらに盛り上がり、あんなに自己紹介の長い飲み会は初めてだといった人もいたくらいです。

こんなふうには、会はそれなりに充実したものとなり、幕を閉じたわけでありました。ひいき目なしで、そこらへんのシンボよりはずっと面白かったと思いますよね。



会員の上山さんは数年前ドイツに1年ほど暮っていたそうです。この風景は、その頃スケッチした中の1枚です。日本の水辺とはまた雰囲気が変わりますね。あそこのベンチに腰掛けて、日がな一日ホゥ……としていられたら幸せな気分になれるのではないかなあ……。

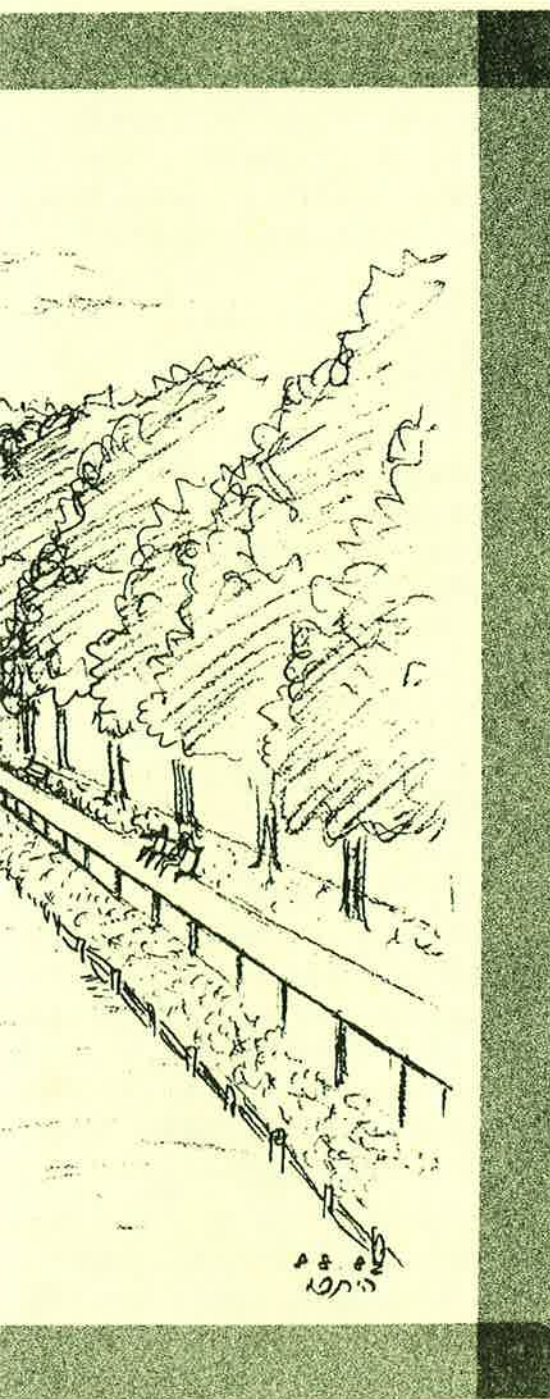
水辺の風景

休日の昼下り、ちょっと散歩に出かけてみる。小さなブリッジを渡りかけ、橋の中央で自然と足が止まり、手スリにもたれかかりながら水辺を見渡してみた。

水辺には周囲のうっそうとした緑が映しだされ、鴨の親子が活発に泳いでいる姿が目に入ってくる。周囲ではランニングをしている人、のんびりとベンチに腰掛け読書にふけている人、ま

た遠方の。あずまや。風の建物の回りでは、何やら子供達が楽しそうに遊びまわっている。きつと、この子供達は冬には凍った水面の上で、スケート靴にはき替えて遊ぶのだろうと考えながら目を上に向けてみると、広がった青空にちょっとアクセントをつけるかのごとく、ポツンと教会の塔が見えてくる……何となく幸福感にひたれる時である。

これは西ドイツ・ミュンヘンでの日常のごくありふれた光景ですが、それぞれ季節ごとに落ち葉拾い、水辺の草刈り、水量調整等、都市の中にあつて、人為的なものと自然とがうまく調和している好例と言えるのではないでしょうか。このような場面が私たちの日常の中でもできるだけ多く出会えればと考え、この会の活動を続けていきたいと思えます。



Lympenburger Kanal, München

水を肴におおいに語ろう 88

『水を肴におおいに語ろう 88』と題して会の1周年記念イベントを行なったのは、皆さんご御存じですよね。少し遅くなりましたけど、来られなかった方のために紙面でその様子をお伝えしたいと思います。最初に断わっておきますが、ここでお伝えできるのは全体のほんの一部です。当日は事務局の予測50名をはるかに超え、100人近い人が足を運んでくれました。大熊会長の人格か、会の魅力か、ユニークな顔が揃ったパネラーのせいかは知る人ぞ知るというところでしょう。

といった前置きはさておいて、肝心の内容についてグリーンシグマの相楽さんから紹介してもらいましょう。



「初めに、事務局から一年目の総括として生活者の目で水辺を視つめた成果を申し上げました。水辺を子供と一緒に歩いてゆくことによって、次のような確信が持てました。それは、水辺が親しみを持てる状況にないということです。今年はこのことが思い知らされた一年であったと言えるでしょう。」



山道省三さん

『河童になって川を楽しむ会のレポート』

シンポジウムのゲストとして「よこはま かわを考える会」からわざわざ来て頂いて、6年間のユニークな活動を報告してくれました。圧巻は、三面張りの水路風小河川での清掃と遊びと宴会（食事会）構成のイベントでしょうか。私たちよりズーッと恵まれない環境で、自然復権の活動を楽しんでいるようです。是非、私たちも一度お邪魔してみたいものです。

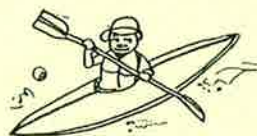


弓納持福夫さん

『水辺の写真家』

私たちがよく目している水辺や田園などの風景。時には光となって新潟の美を磨き出している写真家です。とりわけ暗く表現されがちな新潟を、豊かで美しい風土として表現することをライフワークにしているとのこと。

魚野川の素晴らしいポイント、阿賀野川の源流から河口までの川の輝き、信濃川の早朝の黄金色などをスライドで紹介して頂いて、会場のすべての眼がスクリーンに釘づけになりました。



土方幹夫さん

『水辺のスポーツ家』

土方先生は、子供達を教える若い優秀な先生をつくるのが仕事です。御自身も野性的な感性をもって、山や川に挑んでいるスポーツマンです。様々な水辺を通して、子供達に学ぶこと習うことの意味を教え、子供達がその中で泳げる水辺をつくるためにも、ふるさと新潟からよい政治家を出すべきであると訴えられました。



百武正雄さん

『水辺の料理人』

湿雪多雪地域である新潟県の北部、村上市は江戸時代より鮭漁が盛んである。高多湿地域の生んだ独特の「鮭びたし」は雪国ならではの保存料理である。その鮭も、三面川の上流の自然と、伏流水のある川と、豊かな海のかみあわせで生れている。その川を守り、育て、浄化していくには一人一人の心がけが出発点であることを声を大にして語ってくれました。



宮崎謙一さん

『水辺の音楽家』

人間は水音に対して、安らぎを感じるが、現実の身の回りの騒音で、現代人は音に対して閉じてしまっている。結果として、音に無関心になり、騒音公害を生み出している。古典ではヘンデルの音楽がある。水上での独特な反響で深みがある。水面では音を遮り、土手で音は反射する。カナダの音楽家で湖上で指揮をし、独特な音作りをしている人もいるとそうです。



その後、様々な人から活発な意見が出て、会は後半になるにつれ、大いに盛り上がりました。当日行なう予定だった総会も取り止め、ギリギリまでシンポジウムは続けられたのでした。ここに書いてあるのは、本当に一部分で、先生方からは、もっといろいろなことをお話していただきました。その後の二次会も、さらに盛り上がり、あんなに自己紹介の長い飲み会は初めてだといった人もいたくらいです。

こんなふうに、会はそれなりに充実したものとなり、幕を閉じたわけでありました。ひいき目なしで、そこらへんのシンボよりはずっと面白かったと思いますよね。

まずは 「水辺の会」 会長へ思うこと
から……



「水辺の会」の2年目に思う

大熊 孝

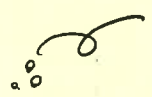
1周年記念の『水を肴に多めに語ろう』
(10月30日(日))は、パネラーをはじめ参加者の皆さんのお陰で、新聞や会員以外の方々からも大変楽しく有意義であったと好評を得ました。また、11月27日(日)の総会では、角田妙光寺の住職兼会員である小川英爾さんに会場を提供していただき、寒い中多くの会員にお集まりいただきました。その際、小川さんには妙光寺の水害と河川改修の苦労話をしていただき、大変勉強になりました。ここに合わせてお礼申し上げます。

さて、その総会の時にも話したのですが、来年の夏ごろ、先日のシンポジウムで小熊さんから報告のあった「近自然河川工法」についてスイス、ドイツに見学に行き、10月の2周年記念の時には「水辺の生態工学シンポジウム」を開催できたらと考えています。この話を、生態学の権威であり、「近自然河川工法」について詳しい信州大学の桜井善雄先生(長野県水辺環境保全研究会会長)に、たまたま新潟でお会いする機会がありましたのでお話ししたところ、ツアーをくんで一緒にドイツ、スイスに行きましようということになり、かつ来年10月のシンポジウムへの参加もご快諾いただきました。ツアーのことは皆さんにもご参加いただけるように計画したいと考えています。また、シンポジウムの日程は、発会が10月15日でしたので、14日(土)あたりが適当ではないかと考えています。これも詳しく決まり次第いずれお知らせいたします。

ところで、なぜ水辺の「生態工学」にこだわるかを一言申し上げておきたいと思います。

「生態工学」という言葉は、まだ世の中に認知されておられませんし、どう定義してよいかわかりませんが、今感じることを少し綴ってみましょう。私はこの言葉に、イキモノを通じて技術を見直すことの意義を感じます。むろん、イキモノを扱う学問、技術はあまたありますが、それらは「生態工学」と根本的に異なっているように思います。例えば、バイオテクノロジーにしても、自然の中から人間の都合の良い部分だけを抽出して扱っているに過ぎず、従来の近代的自然科学の延長上にあるに過ぎません。即ち、原子を扱うのも、遺伝子を扱うのも基本的態度は同じであり、部分にのみ注目していると言えます。部分にのみ注目していると、だいたい一方通行の科学技術になってしまい、生命の循環系を絶ち切ってしまいがちです。例えば、近代社会から吐き出されるゴミや汚物は、どこかに捨てられるだけで、基本的には循環利用は考えられていませんし、原子力技術にしても使用した後の燃料棒の始末は宇宙にでも放り出さないかぎり解決のつかない問題となっています。今までの近代的科学技術は、自然が無限大であるという前提で、自然からの収奪と自然への廃棄を気ままに自由つづけてきたといって過言ではありません。宗教的概念で言うならば、天国→現世→地獄があって、天から得られるものはすべて取得し、現世で不要になったものは地獄に送り込めばよいという考え方でしょうか？

これに対し、「生態工学」は、ありのままの自然を部分に切らずにトータルに扱うことを前提とし、生命の誕生・成長・消滅を循環的にとらえ、その循環系一輪廻を壊さず、人間活動をその中に組み込んでいく技術と、定義したいと思います。川が対象の場合でも、治水や利水だけでなく、川の魚や鳥、昆虫、



思いつくままに...

編集雑記

なんとなんと1989年になってしまいました。水辺考第2号は1988年度中に発行する予定だったのに。予定は未定、予定はあくまでも予定でしかなかったという話なのでした まる。

今号の特集は「水辺に思う」という事で、皆様から原稿募集したつもりなのですが、まるで集まりませんでしたね。やっぱり、個人に直接頼むとか、賞金をつけるとかしないとダメなのでしょう。 (私だったら、CDプレイヤーが賞品にあったら、応募したと思う。) そんな中で、実は1人だけ文章を寄せてくれた人がいました。最後になりましたけど、ここに紹介したいと思います。「第3回ウォッチング(7月31日)は素晴らしかったと思います。

子供達がたくさん参加して、目的地の沢海まで、みんな元気に歩き通した事が何より印象的でした。

当日は幸い天候にも恵まれ、要所要所で大熊先生の簡潔な説明を聞くことができ、有意義な一日でした。欲をいえば、満願寺の閘門と水門を目の前にして、その構造と機能について大熊先生から解説していただきたいかと思いました。

今後ともこのようなウォッチングの機会を度々与您に提供したいと思います。

小林二郎 記

小林さん、ありがとうございました。上山さんは、こちらからお願いして、快く絵と文を寄せてくれました。また総会の時も紹介しましたが、片岡さんがノーギャラでマークを考えてくれました。皆さん、お忙しいのに、本当にありがとうございました。

会のほうも最初は内輪だけの盛り上がりを見せていたのに、シンポジウム、第2回の総会を経て、新会員が大分増えました。現在は40名程度です。いつのまにか会自身がどんどん新しいエネルギーを吸収して、大きくなっているのです。これは、なかなか不思議です。

1年を振り返ってみると、水辺の会も何やらかんやらで結構歩いたものです。7月の第3回の小阿賀野川〜阿賀野川のウォッチングは、ホントにひたすら歩きました。あの時ほど、カンジュースの自動販売機に恋い焦がれてしまったことはありませんでした。結局、現代文明に浸りきっている自分を、再確認してしまう結果となってしまったのであります。おまけに次の日には足腰がすっかり痛くなってしまった。体の老化をも再確認してしまいました。

まあ、普段の生活で何て歩いていないのかということですね。そして、川に沿って歩いても、川にほとんど近づけない、近づける場所がないというのは、驚くべきことでした。川と切り離されている生活が「あたりまえ」になっている今の時代は、自分から歩み寄っていかないと水辺に親しめない時代なのかもしれません。人工の水辺はウォーターフロント全盛の今日では、都市の中でどんどんつくられています。けれど本来の自然の水辺は、目に見えないところで確実に切り離されていっているような、そんな漠然とした不安感を感じてしまうのであります。今の世の中全体が、そんなふうにごまかされている、だまされている部分が多いような気が.....しませんか?

BOOKS



「水の時代をひらく」 木原 啓吉 編

LGC総合研究所

水に関わる環境問題、住民運動などをまとめた記録です。その中に、会員でもある久保田さんが「鳥屋野瀬」について寄せた一文もあります。

あと、個人的に野田知佐子の「日本の川を旅する」②「アサギ」がおすすめです。 (文庫、新潮社) 著者の素直なエッセイです。 (思いつく)

今年も 皆様にとっ

ついでにとっ

よい年であります

うに...

1989年 1月

新年の御あいさつまで...

